

初めての「山の日」を迎えて

8月11日は「山の日」。今年から始まる国民の祝日です。その趣旨は、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ことであるとされています。

その「山の日」の制定に大いに関係する高松出身の先人がいます。小島烏水（こじまうすい）という人です。1873年（明治6年）に高松藩の家老格の家柄である小島家に生まれ、明治8年に一家で上京。横浜商業学校卒業後、横浜正金銀行に入行し、シアトル支店長などを歴任。「日本アルプス」などを著し、文筆家であると同時に登山家としても知られ、明治38年、日本山岳会初代会長となっています。日本山岳会は「山の日」制定運動の中心的存在でした。

平成25年には、日本の山岳登山の父とも言えるこの小島烏水をたたえようと、峰山公園に顕彰碑が建立されました。その後、毎年4月に日本山岳会の主催で、「小島烏水祭」が高松で開催され、当日は全国から多くの山の愛好家が集まります。烏水の子孫の方々や、日本を代表する著名な登山家も来られ、烏水の業績をしのびながら、山にまつわる様々なお話が聞ける楽しい会合となります。

一方で、高松市内で山といえば、いわゆる里山の存在が身近です。居住地近くに存在する里山は、生活の一部としてさまざまな形で利用されています。高松市では、平成21年度から、「いざ里山市民活動支援事業」を実施し、日山、堂山、勝賀山など、市内16か所の里山でおこなわれているさまざまな市民活動に対して支援をおこなってきました。今では多くの市民が近くの里山を、登山や休養、自然学習などで楽しみ、より親しみを増しています。

小島烏水が愛した日本アルプスの山々も、市民が親しむ里山も、姿、形など山容は全く違えども山は山。初めての「山の日」を迎えるにあたり、小島烏水の著した一文を記し、山の有り難さに敬意を表しておきたいと思います。

山を讃する文（抄）

昨日の我は今日の我にあらず、今日の我はおそらく明日の我にあらざらむ、而してこれ向上の我なり、いよいよ向上して我を忘れ、程を逐ひて自然に帰る

山は、向上心の象徴であり、最後は自然と一体化できることがその魅力である、という

ことでしょうか。